

母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに 社会科学的意義に関する研究

児玉 和夫（心身障害児総合医療療育センター）

武藤 安子，江木 明美（心身障害児総合医療療育センター）

58年度報告で提出したように、われわれは重い障害の乳幼児を持った母親がいかにして安定した母子関係を作り出し、積極的療育につなげていけるかを実践の中から検討してきている。幼児期を中心とした母子通園の場と、乳児期を中心とした母子入園の場とでそれぞれの症例を分析し、今年度は問題の提起を行なうが、次年度では基本方針提起につなげていきたい。報告は第一部の母子通園での分析を主に武藤が、第二部の母子入園での報告を主に江木が行ない討議のうえ児玉がまとめた。

第一部 母子通園による母子相互作用の 発達治療的意義

1. いわゆる母子間の好ましい相互関係の形成、発展を規定する条件について、子供の側の要因、母親の子供へのかかわり方、母子をとりまく社会的ネットワークのあり方を総合的に考えていく必要性が認識されるようになってきた。心身に重い障害をもつ乳幼児の、発達の初期によくみられる、人を含む外界への関心の乏しさ、人々のコミュニケーション行動の未発達さについては、障害の重さを証明する状態のひとつとして把握されることが多かった。しかしよく分析すれば、出生以来の乳児の側のなんらかの生得的な基礎により母親の子供に対する態度が阻害された結果、乳幼児の知的・社会的発達に影響を与えていたと推測される場合が少なくない。そこで本研究では、①母子間の相互関係の形成、発展を規定する条件の総合的検討。②母子相互作用の機能の療育方法論的位置付けと実証。③母子通園における発達援助の体系化、を目的として臨床観察を行なってきた。

2. 母子間の好ましい相互関係の形成の指標、時期については個人差が指摘されているが、その発達は、乳幼児が特定の人物（母）についての初歩的な表象をも

ちうるかという認知技能の発達および、その人とのように豊富な相互作用をつみ重ねてきたかによる。重い障害をもつ乳幼児の母子関係の形成は、一般の発達の過程に比してその指標の発現の時期に特徴がみられることは確かである。ただし、当通園科に過去5年間に在籍し、療育をうけてきた150名の乳幼児を観察したところ、障害の重さ、種類に関係なく、ほとんどの子供が3歳～3歳半頃までに、母親への積極的認識、母親への preference（分化した指向行動）を示すに至っている。また、基本的な愛着行動の“再刻印づけ”のような過程を経て、他者への関心、言語能力を含む発達全般に良好な経過をみた場合も少なくない。

3. このような臨床観察結果により、対人認知や情緒的発達に関し、一般の生活年齢の発達課題と同様に0歳～3歳までの乳幼児の療育の基本的課題として受け止め、療育の体系にシステムとして反映させていく対策の必要性を感じている。今後更に精密な検討をすすめていきたい。

第二部 母になること——重度重複障害乳幼児の 母子入園によるアプローチ

周産期医学への関心の高まりとともに、われわれのセンター母子病棟にも、多くの乳幼児、それも重度重複障害をもつ者の入園が続いている。この一年間に入園した100組に及ぶ母子を対象として、「母になること」という観点から考察を試みた。

ヒトは、270～280日の在胎期間を経て生まれるが、この間、妊娠した女性（母親）の側は、つまり、胎動などを実感する。一方ヒトの新生児の場合、生まれ出た個体は、他からの援助なしには生存すらできない。いわゆる子宮外胎児期といわれる状態が一年近く続き庇護を必要とする。一般に母となった女性は妊娠中の実感に続き、授乳やオムツ替え等の日々繰り返される

育児行動と、乳児との相互交渉的な関りの中で、一日と「母」と成っていくのだと思う。

問題提起

本研究では、誕生直後、あるいは乳児期に子の医療上の処置や治療、家庭事情等のために長期間母子が分離していたケースを取り上げ検討した。

方 法

- ①母子一組に対する個別の心理指導
- ②母子10人前後のグループに対する集団カウンセリング的アプローチ
- ③週末に出される母親の日記
- ④集団保育、自由遊び場面での観察など、

結果および考察

症例の考察については、第48回（1984. 10）日本心理学会において、以下の三症例について考察した。

症例 I

高校3年時、月経周期不定のため、妊娠自覚のないまま28週（1140グラム）にて出産。7カ月後に母子対面し入園した。母親役割のとれなさが著しかったケース。

症例 II

頻回の入院により母子分離され、児への心理的受け入れにとまどっていたが、集団カウンセリングの中で、母としての成長をとげたケース。

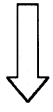
症例 III

重篤な欠損奇形のため自宅に引き取ることができず、乳児院にあづけて2歳半になり母子入園し、初めて母と子として互いに激しくぶつかりあいつつ、母と子の絆を形成した3カ月の経過。

症例検討からは、

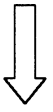
- ①母子入園という形態によって、母子がともに過ごす時間が十分に与えられたこと。
- ②他の母子とともに暮らすということによって母としての自覚と喜びを持ちえたこと。
- ③第1子の育児経験がある場合には、第2子と長期の分離期間があっても、短期間のうちに「母に成る」ということはいかなることであり、どの要因が欠落した時困難さをきたすのか、いかなる援助が有効なのか、より鮮明に示唆されるものと考え、今後の課題とする。

以上の検討の後、次年度に療育方針を提起していく計画である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



58 年度報告で提出したように,われわれは重い障害の乳幼児を持った母親がいかにして安定した母子関係を作り出し,積極的療育につなげていけるかを実践の中から検討してきている。幼児期を中心とした母子通園の場と,乳児期を中心とした母子入園の場とでそれぞれの症例を分析し,今年度は問題の提起を行なうが,次年度では基本方針提起につなげていきたい。報告は第一部の母子通園での分析を主に武藤が,第二部の母子入園での報告を主に江木が行ない討議のうえ児玉がまとめた。